

日本社会心理学会会報

234号



発行 日本社会心理学会 <https://www.socialpsychology.jp/>
編集・制作 広報委員会 (担当常任理事: 内田 由紀子)

2024年12月1日

日本社会心理学会第65回大会 開催

期日: 2024年8月31日(土)・9月1日(日)

ポスター発表 2024年9月19日(木)~10月3日(木)

会場: 日本大学文理学部とオンラインのハイブリッド会場、およびWeb会場

大会準備委員長: 岡 隆

- 参加者数 492名 (予約参加 366名・当日参加 126名)
- 発表件数 口頭発表 78件、ポスター発表 198件、大会シンポジウム 1件、自主企画ワークショップ 2件
- 発表取り消し 6件

岡 隆

8月22日に発生した台風10号は、当初の予報とは異なり、「超ノロノロ」で「迷走」し、各地に甚大な人的、物的被害をもたらしました。被害に遭われた方にお見舞いを申し上げます。大会当日の関東地方は比較的穏やかでしたが、東海地方以西では航空、鉄道と大きな交通障害が発生しており、完全対面開催で進めてきた第65回大会は、急遽、オンラインを主とするハイブリッドで開催することとなりました。参加を予定されていたみなさまには、ご不便をおかけしましたが、なにとぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

実質2日間の準備でしたが、本学会で初めて導入したプロフェッショナル・コンGRESS・オーガナイザー(PCO)の臨機応変の対応のもと、シンポジウム、口頭発表、ワークショップ等、大過なく進行したものと思います。ポスター発表も、活発な質疑応答がなされ、およそ1か月間にわたった会期を無事に終えることができました。

何よりも、参加者のみなさまが、このコロナ禍を経て獲得してきたスキルとメンタルのおかげだと思います。みなさまのご協力に厚く御礼申し上げます。

(おか たかし・日本大学・第65回大会準備委員長)

大会参加記

学会参加記: 「ちっ、サンサン (Shanshan 台風10号) め」

佐藤 剛介

社会心理学会は私が初めて所属した学会であり、今回の大会が入会後18年目にあたる。その大会企画シンポジウム「社会心理学は世界的な課題に責任を持てるのか」で、障害やマイノリティについての話題提供をしないかという話をいただいた。光栄だ。何度も参加しているので、シンポジウムでどういったトピックスが扱われてきたかも、どういった人々が話題提供をしてきたかも知っている。その時期の旬な、あるいは今後の拡大が予想される研究や方法論などについて、大御所もしくはボスライオンを追いやるヤングライオンみたいな若手の先生が話題提供をしてきた場だ。とにかく光栄である。

でも、正直に言えば、私は結構なびびりなので、大きな不安が先行した。「私でよいのか? 務まるのか? 何分間話すんだ? たいした業績もないのになぜあいつが・・と言われないか?」などを考えたように思う。しかし、この話を引き受けないという選択肢はなかった。私がかつて訓練を受けた北大の社会心理学研究室では、チャンスをテイクしない奴はバカだと教えられており、しょぼい私ですらそれが染みついていたり、そもそも身の丈にあったことしかできないのだから力を尽くすまでである。あとは発表までに、何をどのように話すか、与えられた発表時間内で、いかに学会員の皆様に私たちの研究を面白い、あるいは重要だと思ってもらえるようにで



きるかを考え、内容を練って気分を高めていくだけであった。

今回の話題提供の中でもお話しさせていただいたが、私は2016年に障害者と非障害者の比較研究を、社会心理学会のポスターセッションに持ち込んだことがあった。題目は、「障害者に関するエビデンスの構築(1) 障害者の社会適応度と関係流動性認知」だ。障害に関する研究をライフワークにし、それを社会心理学会で発表していこうという決意があったので、「(1)」とした。1,740人(F=870)のパネルを使って、自尊心、人生満足感、友人や家族関係満足度、性格5因子、QOL、社会環境の関係流動性認知と自身の流動性認知も測定していた。セグメンテーションなしで、サンプルの中に177名の障害者(自認)がいた。社会環境の関係流動性には差が無いが、自身の流動性には差があり、外向性、社会適応指標についても差があった。いずれにおいても障害者が低いという結果だ。障害者といったマイノリティを対象とする研究が、社会心理学者に受け入れられにくいのは想像できた。とはいえ、関係流動性の測定も行っていたし、クロス・マーケティング社のパネルの10%程度に障害があるという知見を重要視してくれる人も少しはいるかもしれないと思った。しかし、ポスター発表中に、顔見知りの方々と挨拶をすることもあっても、貼られていたポスターに関する話はなかった。ただ1人、立教大学の石黒格先生だけが話を聞いてくださり、パネルの中10%程度の障害当事者が入っているとすれば、従属変数によっては障害の有無を統制しなくてはいけない、なぜ外向性に差が生じるのか、障害の研究は社会生態学的アプローチそのものなど話で盛り上がった。とにかく嬉しかった。

その後、社会心理学会で障害当事者に関するデータの発表は行っていない。障害に関する研究以外のポスター発表では、多くの方に質問等をいただいていた。やはり、障害者というマイノリティを対象とする研究は、社会心理学会ではあまり興味を持ってもらえないかもしれない。そう考えていたこともあって、今回の発表内容は練りに練ったし、発表が近づくにつれ気合いも入った。「社会心理学は世界的な課題に責任を持てるのか」という難しい問いであったが、社会心理学者(少なくともその一部)は、こうした問題に挑戦しなくてはいけないだろうと思えたとし、障害を取り巻く問題は、当事者だけでなく、当事者を取り巻く環境の問題であり、周囲の人々自身も「環境」なのだから、社会心理学者が興味を持たないはずがないと・・・

しかし、29日に鹿児島に上陸した統計史上最強クラスの台風は、九州を縦断した後、北に抜けるのではなく、瀬戸内海を東進、香川県辺りから南東に進み、なんと太平洋に出た。その後、東海道沖で北上を開始し、名古屋を直撃するのか、それとも静岡方面に向かうのかと思われたが、突然太平洋上で熱帯低気圧になった。これが9月1日の話である。無論この前後で、暴風域に入った、あるいは竜巻や豪雨が発生した地域もあった。線上降水帯の発生予想も難しい昨今の情勢も考えれば、大会をオンライン開催に移行するという学会事務局の判断は正しかった。私も、社会心理学会の前に障害関係の学会に参加予定だったことを考えれば、この迷走台風と一緒に東京で何泊もしなくてはならなかったかもしれない。びびりだけど、気合いを入れて「いざ勝負！」みたいな気持ちでいたのだけれど、まあ仕方が無い。

ところが(あとは愚痴なのだが)、オンライン発表だと、誰に聞いて頂いているのかもわからないし、1通のチャットを頂いた以外はどのフィードバックも得られず、指定討論の先生や企画立案された先生とゆっくりお話できる機会もなく・・・。どういった反響があったのかさっぱりわからない。対面であれば、もう少しいろいろな先生と議論する機会があったはずだと思う。やはり学会は対面がよいということを痛切に感じた第65回大会であった。

大会事務局や企画委員会の先生方に対する文句は微塵もなく、こうした機会をいただいたことには感謝しかない。幸いなことに、社会心理学会の後、熊本で開催された日本心理学会で、数人の方々と私たちの企画シンポジウムの発表についてお話をする機会もあった。

(さとう こうすけ・久留米大学)

大会参加記

三木 穂菜

今年の大会は台風のためにオンライン開催となりました。口頭発表は日程通りにZoomで進行し、ポスターセッションはオンデマンドで実施されました。普段会うことのできない方とお会いできない寂しさを残しつつも、大会全体を通して充実した時間を過ごすことができましたのは関係各所の方々のおかげです。

オンライン開催はその性質上、カメラをオンにしてさえも非言語的情報が取りこぼされる側面があるため、質問をする際にハードルがありました。私自身、口頭発表では限られた時間にお会いしたことの無い先生に質問をすることを躊躇って発言できませんでした。また、オンデマンドによるポスターセッションでは、質問を入力している途中で自分の質問が取るに足らないように感じたり、その領域にとって的外れかもしれないと不安になったりして、結局書き込めませんでした。

しかし、上記のようなハンディのある状況でも、全体を通して満足度の高い学会であったといえます。口頭発表の質疑応答は沈黙の怖さがありつつも、活発に意見交換がされておりました。例えば私事ですが、とても緊張しやすい性格で聴いてくださっている方が見えない中での発表であったために完璧な発表はできませんでしたが、多くの先生方が関心を示して下さいました。

質疑応答の時間では足りないからと Zoom のチャット機能に先生方がコメントを残してくださいました。声を出しての応答では、互いの共通理解を形成して議論することができず、チャット機能では、先生ご自身の視点から私の研究発表の曖昧な点を言語化して残して下さいました。そのおかげで、普段見えていなかった角度・普段使用しない言葉遣いから自身の研究を眺めることができました。このように、Zoom の機能をうまく活かしながら議論がなされた 2 日間でした。

また、ポスターセッションは後日にオンデマンドで開催されました。対面のポスターセッションでは、多くの工夫がなされた色とりどりのポスターが並べられているためわくわくします。ちょっと立ち止まって見てみようとなることもあります。そのため、オンデマンドだとクリックするまでポスターが見えない点は少し味気なく感じました。しかし、オンデマンドは時間の制限がありません。だからこそ、全てのポスターが読めるチャンスでもあります。なので、対面では時間の制約から見られなかったポスターもじっくりと拝見することができ、研究の多様さや自由さ、分析方法など大変勉強になりました。また、他の先生方のやりとりをこっそり覗き見することができたので、他分野の研究の見方を学ぶ機会にもなりました。

オンライン開催には多くの障壁がありますが、大変楽しくも濃い時間となりましたのは円滑な運営・進行をして下さった先生方をはじめ、素晴らしいご発表やご質問、ご参加されていたみなさまのおかげです。この場を借りて、このような機会を下さった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました！

(みき まりな・関西学院大学)

大会参加記：サイド・トラックから得られるアイデアと他者感覚

中尾 元

日本社会心理学会第 65 回大会は、台風の影響でオンラインでの開催でした。見通しが完全に見えない中、急遽オンライン体制への転換をいただき、恙ない運営をいただいた大会委員やスタッフの方々に、まずはここから感謝をしたいと思います。

さて今回の大会では、私は連名も含め、2 件のポスター発表を行いました。「コミコン・コミュニティにおけるプラットフォーム性と表象：バンクーバー・ボストン・台北の Fan Expo や Anime Con でのフィールド調査」と、「なぜ人々は VTuber のライブにリアル参加するのか：シンガポールのアニメフェスティバルでの参与観察に基づく考察」（筆頭発表者は石盛真徳）でした。特にコミコン・コミュニティの国際調査については、コミュニティ意識やアフィニティ・スペース（affinity space：共通の関心や共通の活動への参加を理由に、人々が同じ場所に集まっている空間などと説明されます）といった概念も踏まえ、参加者の人々のイベントや場所への愛着、帰属意識にまつわる制度的な仕掛けや心理的な側面を考察し、コスプレなどの「自己の表象」に関する文化比較なども行いました。研究の下敷きには、これからの社会が、オンラインのプラットフォーム化が加速していくなかで、人々が協働や共助を含めたコミュニティをいかに築いていけるかといった問題意識がありました。

今回の学会のなかで、考えたことがいくつかあります。一つは、適材適所といった観点も踏まえた、参加者のオンライン・プラットフォームへの慣れです。もちろん、世の中でオンライン参加の方法などが盛んになり年数が経っていることの慣れもあると思います。ただ、今回オンラインに切り替えられたのが、もともと発表者との活発な相互作用を必ずしも前提とした形式ではないシンポジウムと口頭発表だったので、私の勤務校の他の教員も対面参加と大きな違いは感じられなかったという旨の感想を述べていました。これは利点の一つとして捉えられると思います。

その一方で、オンラインでの参加は、あくまで学会の“Doing”（＝学会で行われている諸々のうち、行動的な側面を切り取ったもの）であって、“Being”の側面（＝何もしていなくとも、その場にいるという側面）が極小になるということもあらためて実感しました。（もちろんこれには、東アジアに代表される文化圏では、Doing よりも Being が社会的な規範として強調されるような、文化的な背景ゆえの私の希望も影響しているかもしれませんが。）ただ、上記の Being の側面の小ささを感じつつも、オンラインでの可能性も多大に実感しました。すなわち、最近はオンライン形態でも（例えばチャット機能などで）ある程度は可能で、今回も幸いなことに一部実感できたことですが、オンライン上でも得られるサイド・トラック（あるいはサイド・トーク）の大事さです。ちょっとした立ち話や、偶然誰かと会って何かを話すような交流が部分的でもオンラインでできると、自由連想的にアイデアに繋がることもあります。例えば、今回の学会でも、他の人と意見交換をするなかで、本来のメインの発表の話から少し逸れて（サイド・トラック）、例えば「サブカル」はサブ・カルチャーゆえに「文化」とは何かの話になり、それがまた脱線しつつも「異文化」関連の話になり、ひいては昨年に私が上梓した『異文化間能力研究』（中尾元編著・渡辺文夫監修、2023 年、新曜社）を基に新たな観点をいただくなど、望外の喜びがありました。このプロセスのイメージとしては、「発想法」と似て、意味的な緩い連合と、ある程度背景を共有している他者との接触（Being としての接触）、そして考えを表明するハードルの低さなどが重要な要素になっているように思いました。



同時に、サブカルなどのイベントからの話題のスピンオフで、私が近年関心を持っている、ソーシャリー・エンゲイジド・アート (Socially Engaged Art) について話が及び、この“Socially”に、社会心理学はいかに呼応するのだろうか？などの話になった点もありました。これらはオンラインでも体験可能なBeingの一例であり、ほかの人とともにいるという感覚(他者感覚といっても良いかもしれません)は、予想しない反応やコメントが他のひとから返ってくることで実感することでした。

バーチャル・リアリティ研究の第一人者のJeremy Bailensonが考察をしているZoom疲れ (Zoom fatigue) などの側面もある一方、まだまだオンライン・プラットフォームにはこれから姿を変えていく意味での伸びしろと可能性があるようにも思えました。今後も、対面であれオンラインであれ、本学会をアイデアを膨らませる良き場として発展させていければと思います。

(なかお げん・追手門学院大学)

院生リーグ報告

森 隆太郎

院生リーグは、有志の院生会員が本大会の前日に近隣で開催する研究会で、近年は継続して開催されています。私自身は今回が3回目の参加で、幹事の一人として運営に関わりました。そのご報告と感想を記します。

幹事にとって有り難いことに、先輩方の丁寧な引き継ぎのおかげで、開催準備はほぼ定型化されています。日程と場所を打診する・発表者を募る・懇親会場の予約をする・それらの作業を幹事グループで分担する。今回は台風という直前のハプニングこそあ



りましたが、東洋大学の柿本さんをはじめとする他の幹事の皆さまのご尽力で滞りなく開催することができました。また、今年は社会心理学会の研究交流活性化制度を通じ、金銭的なご支援もいただきました。関係者の皆さまには改めて感謝申し上げます。

当日は、約30の口頭発表と10を超えるポスター発表があり、対面・オンラインで合わせて約100名が参加する盛況ぶりでした(写真は対面で終わりに撮ったものです)。個人的には、多数決と全員一致の決定方式が機能する条件の違いを分析した発表や、(期待値に直すと同じはずの)割引とポイント付与が消費者行動にどのように異なる影響を与えるかを探った発表が印象に残っています。発表していただいた皆さん、聴衆として参加していただいた皆さん、どうもありがとうございました。

本大会の前日に院生同士で集まることの意義について考えると、院生の「幸せ」で「不幸せ」な研究生生活を後押しすることにあると思います。境遇の似た院生同士が会えることは、より「幸せ」に研究するための有形無形の後押しになるでしょう。苦心していた実験プログラムの組み方について助言をもらえたり、知らなかった文献に気づいたり、あるいは他にも院生がいるという単純な実感に元気づけられたりすることもあるかも知れません。

一方で、院生リーグのもう一つの価値は、「不幸せな」議論を生むことだと考えます。これは『言語とフラクタル』で2021年に毎日出版文化賞を受賞された数理言語学者の田中久美子さんの「創造的なことをしながら幸せな人生を送ったという人間は実に少数ですから」という言葉に影響を受けています。予定調和から外れた論争的で「不幸せな」場があることが、長い目で見ても何かを生み出すためには必要であるということだろうと思います。礼儀正しさや謙遜、知識の格差といった要素が第一とならず、それよりも素朴な反応や率直さが重視される院生リーグはそんな場となれる可能性があります。その意味で、少なくとも今年は、滞りなさの反面で幸せに過ぎた感も(私自身にとって)否めません。研究を続けるための「幸せさ」と、新しいものを生み出すための「不幸せさ」のバランスに正解はありませんが、もう少し「不幸せ」を許容する院生リーグの可能性を提案し、この報告を締めたいと思います。来年度以降も院生リーグが開催され、多くの院生の、時に幸せで、時に不幸せな研究生生活の後押しとなる場であり続けることを願っております。

(もり りゅうたろう・東京大学)

村田光二先生が名誉会員に推戴

日本社会心理学会 2024 年度総会にて、村田光二先生が名誉会員に推戴されました。日本社会心理学会に対するこれまでの多大なる貢献に心より感謝申し上げます。この度の推戴に対し、先生よりコメントを頂戴しております。以下に掲載いたします。

名誉会員に推戴していただいて

村田 光二

社会心理学会にどんな貢献をしたのだろうか？と自問自答すると、すぐに思い浮かぶのは大会運営、開催の仕事をしてきたこと。初めは 1985 年の東大大会。当時学振の研究者だった私は受付係の責任者を任された。その後 1989 年には、東京学芸大学に就職していたが、東京女子大学大会の事務局長の安藤清志さんの命を受けて準備委員に加わった。1991 年には磯貝芳郎準備委員長のもと、私が学芸大で事務局長の仕事をした。1993 年にはまた東大大会で、一橋大に転任した初年度だったが、準備委員の 1 人として手伝った。そして 2002 年の一橋大会では準備委員長の大役を仰せつかった。

常任理事としても、学会活動担当とそこから分かれて新設された大会運営担当のみで、実は事務局長も編集委員長（編集委員さえ）もしたことがない。とは言っても、貢献したのかどうか怪しい。イベント好きで大会好きが、好きなことをしていただけかもしれない。何が実績かと問われれば「ウン」と唸るしかないし、何より大会主催校探しの難問がいつまでたっても解決できなかった。

それよりも組織改革、選挙制度改革の一翼を担ったことの方が貢献だったと自分では思っている。1997 年に特設された「2007 年委員会」がその改革案の議論を重ね、成案を常任理事会に答申し、木下富雄理事長のもと、実現にこぎつけた。その中心は池田謙一さんで、彼の知恵と力がなかったとしたら成し遂げられないものだった。支援したのが浦光博さんと私で、若手 3 人の意見が大幅に通じ、理事の任期を 4 年にして、仕事を一期したら必ず 2 年休まないといけない制度にした。理事当選者が理事長を互選するのではなく、会員が直接会長を選ぶようになった。学会運営の中心となる人がどんどん入れ替わって不安定な組織になる心配があったが、特定の人に依存せず多くの人が支える組織に変貌したと思う。

新制度の下、1999 年に初代の会長に着任したのが永田良昭先生であった。このとき事務局長に着任したのが大淵憲一先生だった。彼は、事務局の改革に取り組み、事務仕事や編集の雑務を外部の企業（国際文献社）に委託するようにした。自然退会という、一見冷たいようで合理的なシステムを導入したのも彼である。これらの改革も社会心理学会にとって大きな出来事だったし、他学会にも影響が波及しただろう。

以上の制度改革は、25 年以上の月日がたった今でも持ちこたえている。ただ、社会心理学会を含めて、日本のアカデミアが置かれた環境はすでに大きく変わっている。その中で、いつまでもその制度でよいかどうかはわからない。40 代前半だった頃に私たちが行った改革が意味する重要なメッセージは「組織や制度は変えることができる」というものだ。変えるためには現状についての洞察と、改革計画についての熟議と、そして何より仲間が必要だ。

もう 1 つの貢献は、「重荷」を捨てたことだろう。2013 年の 2 月、寝耳に水の状態で会長職当選のメールが届いた。何が起きたのか一瞬わからず、わかったときもこれから事務局長や編集長を頼んで運営体制を整えることができるのかどうか、頭を抱えてしまった。それでも多くの理事や会員の協力を得て、4 月後半の引き継ぎ常任理事会に臨むことができた。その後、新規事業として春の方法論セミナーや若手の夏合宿を実施することができた。何かしたことの中にも幾ばくかの貢献はあったと思うが、何かを止めたことの中に私らしさがあるように思う。

例えば、1958 年から長年にわたって続いてきた公開シンポジウムを、2016 年の富山大でのシンポを最後に休止した。必要があれば復活してもらってよいが、毎年義務のようにしてやる必要はないと思った。また、将来英文誌を発行することを念頭にずっと抱えてきた 1 千万の定期預金を切り崩してなくした。使うあてのないお金を抱えているよりも、学会員に還元した方が役立つと思った。ずっと保管料を払ってきた『社会心理学研究』のバックナンバーを最小限にした。事務局長をお願いした日大の岡隆研究室には、過去の書類などの資料が段ボール箱で 10 数箱あった。それを片付けるために日大に出向き、私の判断で大部分を廃棄した。こういった作業には御批判や抵抗もあったが、学会も断捨離が必要だと思い、実行した。

先に言及した新制度下の最初の常任理事会に、私も初めて入れてもらった。前任者からの引き継ぎは、10cm 幅の分厚いファイルが 1 つ渡されて、「ここに全部入っているからよろしく」というものだった。物を引き継ぐよりは「内容は？」と思ったが、そのまま受け取って自分なりに仕事に取り組むことにした。後任の担当者には仕事内容についてレジュメを作って説明し、厳選した書類だけを渡したと思う（記憶は定かでないが）。

私が社会心理学を学んだ東大の社会心理学研究室の創設時の先生方は、学会がお好きでなかった。私の指導教員だった先生が

社会心理学会大会に(他の学会の大会にも)参加したところを見たことがなかった。85年大会の準備委員長だった先生は、その大会の総会が紛糾したのを目の当たりにして、「だから学会はイヤだ」と酒席で言われたことを覚えている。学会参加を促していただいたのは、その後着任された古畑和孝先生であり、古畑ゼミに集っていた心理学研究室出身の先輩がたであった。特に安藤清志さんと外山みどりさんには、アカデミアの秩序を乱しがちで、上の世代に盾突くことの多かった私を、道はずさないよう導いていただいたと思う。

他方、学会活動を続ける上で、「おもしろい」若手会員として何人もの先達に寛容な心で受け入れてもらった。特に木下富雄先生には何度も助けてもらった。96年の北大大会の夜、とあるホテルのロビーで直談判して、「何とかもう一度理事長に返り咲いてもらえないか」という願いを受け入れてもらった。それが2007年委員会の活動につながったと思う。永田良昭先生にも、事務局担当常任理事でいらしたときには大会運営のことでアドバイスをいただき、会長でいらしたときには新米常任理事の私に対して誠実な態度で接していただいた。こういった先達にも、大会や学会運営の場でお会いした多くの先輩・後輩にも、心より感謝申し上げたい。

以上、記憶を頼りに社会心理学会の活動を振り返ってみたが、自分に都合よく思っている部分があると思う。失礼な点があったらお許しいただきたい。2025年の3月で、現在の所属から定年退職する。その後は「老兵は死なず、走り続けるのみ」と今は考えている。

写真：現地開催が中止となった2024年度大会の総会の日(初日)の夜、会場校の日大文理学部の近くで呼んでもらって、常任理事会の人たちに名誉会員のお祝いをしてもらったときの写真。西田公昭会長(右)と山下玲子常任理事(左)と一緒に。



(むらた こうじ・成城大学)

第26回(2024年度)日本社会心理学会賞選考結果のお知らせ

本年度の日本社会心理学会賞は、優秀論文賞2編、奨励論文賞1編、特別出版賞1編が選出され、第65回大会総会で発表されました。ここでは、各賞の受賞論文・受賞書籍とその理由をご紹介しますとともに、受賞者のコメントを掲載いたします。受賞された先生方、誠におめでとございました。

優秀論文賞

縄田 健悟・池田 浩・青島 未佳・山口 裕幸

「チームワークにおけるチーム・バーチャリティ2側面の相反する関連性：職場のテレワークはチームワークにどのように影響するか」
(第39巻第2号)

本論文は、職場におけるテレワークがチームワークにどのような影響を与えるかについて、チーム・バーチャリティの観点から検討したものである。チーム・バーチャリティを(1)地理的分散と(2)テクノロジー利用の2つの側面に分類することの重要性については、これまで指摘されてきたが、これら2側面の効果を実証的に同時に検討した研究はほとんどなかった。本研究では、これら2側面それぞれと両者の交互作用がチームワークに与える影響を検証しようとした点、ならびにこの影響過程を個人レベルとチームレベルの2つのデータセットを分析することで検討した点において、高い新規性が認められる。個人レベルの分析においても、チームレベルの分析においても、地理的分散はチームワークと負の関連が、テクノロジーの利用はチームワークと正の関連があることが示された。さらに個人レベルの分析では、両側面の交互作用効果が示され、テクノロジーが地理的分散のチームワークへの負の影響を緩和する可能性のあることが示唆された。本論文は、テレワークが特別なものではなく、つつある現在の職場における、効果的なバーチャルチームのあり方の解明に重要な示唆を与えるものであると評価できる。現実の社会的課題を理論的に検討した本論文の完成度は高く、日本社会心理学会優秀論文賞にふさわしい論文と評価された。

辻本 昌弘

「間接的抵抗について」(第39巻第2号)

本論文は、非人道的な行為を行う権力者に対する「間接的抵抗」について論じたものである。この「間接的抵抗」は「直接的

抵抗」とともに本論文において新たに提起された概念である。直接的抵抗が、非人道的な行為を行う権力者と処罰を被りうる形で対決する行動であるのに対して、間接的抵抗とは、処罰のリスクを負うことなく権力者の非人道的な行為を弱体化させる行動である。本論文では、これら新たな概念について読者の理解を促すために具体的な題材を提示することから始め、戦争、虐殺、専制政治などの極限状況下で生じた間接的抵抗の事例研究を行った。そして、その知見に基づいて間接的抵抗の精密な概念規定を行った上で、その有効性と限界、間接的抵抗と直接的抵抗の補完関係などを理論と実践の両面から考察している。本論文は間接的抵抗について多様な史料をもとに説得力のある考察を行ったものであり、さらには、そのような試みを通じて、現代社会心理学が歴史的事例を活用することの重要性と有効性を示したのものである。これらのことから、日本社会心理学会優秀論文賞にふさわしい論文と評価された。

奨励論文賞

若井 大成・岡田 謙介

「説得による態度変容プロセスの認知モデリング：中村・三浦(2019)の事前登録済み二次分析」(第39巻第3号)

本論文は、従来型の説得研究が解決できていなかった問題を指摘し、その克服のために行った再分析の結果を報告したものである。中村・三浦(2019)では、複数の情報源から多方向的に説得される状況における態度変容過程を検討する実験を行い、単方向的な状況における態度変容過程のモデルであるヒューリスティック・システムモデル(HSM)の適用可能性が示された。本論文で指摘された従来型の研究の問題は、(1) 分析者の検証不可能な仮定に依拠した結論が導かれる可能性のあること、(2) モデルの適用可能性を検証するという目的に合わない可能性のあること、の2点であった。本論文では、これらの問題の克服のために実験に適した認知モデルを提唱し、中村・三浦から提供を受けたオリジナルのデータを用い、事後予測チェックとベイズ因子によるモデル比較を行った。分析の結果、HSMが複数源泉・複数方向の説得状況でも適用可能であることが示されたが、HSMに反するいくつかの証拠も得られた。さらに、パラメータ推定値は、いくつかのメッセージと操作の質が実験者の意図したものではないことを示唆していた。本研究では、データ取得前に一部の分析内容を事前登録することによってその分析を確証的分析とすることで、分析の自由度を制限している。その上でデータ取得後に考えた分析を探索的分析とすることで、事前知識による影響を取り除こうとしている。このような取り組みによって、HSMの適用可能性とその限界について説得力のある考察が可能になっており、複数源泉・複数方向の説得状況における態度変容プロセスの解明に向けて有益な知見を提供している。研究の着想とデータ解析の新たな手法において独創性を持つ研究であり、日本社会心理学会奨励論文賞にふさわしい論文と評価された。

出版特別賞

牧野 圭子 (著)

『異国情緒の感じ方—消費者美学の立場から—』白桃書房

異国情緒という概念を消費者美学の視点から分析した書である。著者は、異国情緒を丁寧に定義したうえで、その経験が感覚依存型、情趣型、知的満足型に分類できると主張する。そしてこれらの経験を包括的に説明する異国情緒経験モデルを提示し、文学作品に対する解釈を通じてその妥当性を検討している。さらにマーケティングへのインプリケーションに関しても類型ごとに論考を試みている。

選考においては、異国情緒経験を説明するために独創的で意欲的なアプローチが取られていること、学際的な専門書でありつつ一般読者に対しても社会心理学の問いの広さや深さを伝えられる内容であることが高く評価された。本書が多様な観点から社会心理学に対し貢献すると判断し、日本社会心理学会出版特別賞にふさわしい論文と評価された。

選考委員

委員長 結城 雅樹

理事 浦 光博・小塩 真司・高橋 尚也・田中 知恵・古谷 嘉一郎・村山 綾

会員 小杉 孝司・小林 哲郎・村本 由紀子・山浦 一保

(五十音順)

受賞者のコメント

受賞のことば

このたびは、日本社会心理学会優秀論文賞というたいへん榮譽ある賞を賜り、心より感謝申し上げます。

受賞論文「チームワークにおけるチーム・バーチャリティ 2 側面の相反する関連性：職場のテレワークはチームワークにどのように影響するか」は、職場でのテレワークがチームワークに及ぼす影響について検討した研究です。

この研究は、コロナ禍をきっかけに着手したバーチャルチーム研究の一環として行われました。コロナ禍で急速に普及したテレワークですが、一般的に職場の生産性に悪影響をもたらすと考えられがちです。しかし、研究を始めてみて、私も初めて知ったのですが、バーチャルチーム（ICTを通じた遠隔チーム）の実証研究では必ずしもそうではないという指摘があります。実際に、私たちの別の研究でも、コロナ第1回緊急事態宣言（2020年4月）を挟んだ前後（2020年1月→5月）で、テレワークに移行したのに、チームワーク指標がほぼ横ばいで変化していないという結果も得ています。ここのギャップに着目し、より詳細に検討を行ったのが本研究です。

この研究では、チーム・バーチャリティ（バーチャルチーム度合い）を①地理的分散と②テクノロジー利用の2側面に分け、それぞれとチームワークとの関連を検討しました。その結果、①地理的分散はチームワークに負（-）の関連を示す一方で、②テクノロジー利用は正（+）の関連を示しました。つまり、「テクノロジーを駆使できるプラス効果」と「バラバラな場所にいるマイナス効果」という相反する2つの影響があるために、テレワーク全体としての影響が相殺される可能性が示唆されました。

この論文のより詳細な研究内容は、[こちらのブログ記事](#)にまとめておりますので、ぜひご覧いただければ幸いです。

組織研究はその性質上、なかなか表に出にくい活動も多いのですが、その中で論文として書き上げられたものが、このように高く評価していただけたことをたいへん嬉しく思います。

組織の職場集団やチームに関しては、解明すべき課題がまだまだ多くあり、研究しがいのある研究領域です。また、現場からのニーズも強く、社会的な重要性を改めて感じております。今後、さらに多くの研究者にこの研究分野に関心をもっていただき、組織集団やチームに関する研究が発展していくことを心から願っております。

今回の受賞を励みに、引き続きチームワークやテレワークに関する知見を深め、社会心理学の発展に寄与できるよう精進してまいります。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

（なわた けんご・福岡大学）

縄田 健悟



優秀論文賞を受賞して

このたび優秀論文賞を授与していただきましたこと、身に余る名誉であり、大変光栄に存じます。

まずなによりも、審査にあたっていただきました主査の先生、二人の副査の先生に厚くお礼申し上げます。受賞論文は異例の内容、しかも常識外れのページ数です。審査者の先生方には大変なご負担をおかけしたものと拝察いたします。先生方から頂戴したコメントにより、説明不足点を改善し、また軽はずみな表現を修正することができました。このたびの受賞も先生方のご支援があったからこそだと思っております。今になってみると、審査で無礼千万な反論をしたような気がします。勢い余ってのことですので、どうかお許しください。

また学会賞選考委員の先生方にも心からお礼申し上げます。私自身、何度か学会賞選考委員を務めたことがありますが、たくさんの論文を読んで評価をつけていくのは大変な作業でした。私の長大論文のせいで、ただでさえ重い負担が、ほとんど耐え難いものになったのではないのでしょうか。「長すぎだ！著書で発表しろ！」とお怒りになってもおかしくないところ、優秀論文賞に推挙して下さったこと、感謝の念に堪えません。

この論文が刊行された直後、コルチゾル測定なんぞに入れ込んでいる実験心理学者に抜き刷りを謹呈しました。するとビミョーな感想が返ってきました。

「この論文を掲載するとは『社会心理学研究』はすごい英断を下したね」

辻本 昌弘



褒められているのか、けなされているのか、よくわからなかったのですが、『社会心理学研究』のふところの広さに感銘を受けられたようです。さらに先日、優秀論文賞が授与されたことをその実験心理学者にお知らせしたところ

「私の目はフシ穴ではない、フッフ」

と、なんとも妖しげな言葉が返ってきました。まあ、めでたいときに批判を口にするような人はいないのでしょうか、とにかくにも面白がってくれたようです。

受賞を励みに研究に精進していく所存です。このたびは本当にありがとうございました。

(つじもと まさひろ・東北大学)

奨励論文賞をいただいて

若井 大成

この度、日本社会心理学会奨励論文賞を受賞することができ、非常に光栄に存じます。はじめに、本論文の査読および出版、そして論文賞の審査に携わられた全ての関係者の方々に深く御礼申し上げます。

本研究は、中村早希先生および三浦麻子先生の論文に基づき、複数方向から説得を受けた状況における受け手の態度変容プロセスについて、二重過程理論に基づくヒューリスティックシステムティックモデルが適用可能かを検討しました。具体的には、実験状況における態度変容プロセスを数理的に表現した認知モデルを提案し、分析計画を事前登録した上で、中村先生からご提供いただいた実験データを用いて二次分析を行いました。ややもすれば貢献を疑問視されがちな二次分析を用いた本論文が、このような栄え



筆者：後列左端

ある賞をいただけたのは、お二方の惜しみないご支援あってこそその結果であると存じます。

本論文では、認知モデリングに基づく新たな分析法を提案しましたが、中村・三浦論文でのデータの可視化や分散分析といった既存の分析手法とも、相補的に活用できると考えております。もともと、本研究の発想のきっかけは、中村・三浦論文に掲載されていた、データの二峰性を示すバイオリンプロットでした。加えて本研究では、単純な構造の線形モデルと適合度を比較することによって、複雑な構造の認知モデルを仮定する必要性を検証できました。今後も、心理学理論と実験データとを繋ぐ認知モデリングによって、社会心理学者の皆様と私を含む心理統計学者の、得意分野を活かした協働が促進されることを願っております。私自身も、そのための方法論的進展に少しでも寄与できるよう精進いたします。

最後に、本研究にご助言をくださった全ての方々、そして何よりも、本研究に多大なご協力をいただいた中村先生と三浦先生に心より感謝申し上げます。この度は本当にありがとうございました。

(わかい たいせい・東京大学)

出版特別賞をいただいて

牧野 圭子

このたび日本社会心理学会より、拙著『異国情緒の感じ方—消費者美学の立場から—』(白桃書房, 2023年)が出版特別賞をいただきました。誠に光栄に存じます。

本書は、タイトルにありますように、異国情緒をテーマにした本です。刊行は昨年ですが、異国情緒の概念には以前から関心を持っていました。それは、「情緒」と記されるにもかかわらず、「異国情緒」という名前のついた感情が存在するわけではないからです。「異国情緒」は、「驚き」や「悲しみ」など、基本情動と呼ばれる感情とは随分違うと感じていました。もっとも、「下町情緒」や「江戸情緒」等のことばは存在します。ですから、それらと同様と考えれば不思議ではありませんが、少し調べてみたところ、異国情緒という日本語の前身として「異国情調」があるとわかりました。「情」の部分は同じですが、「緒」ではなく、「調べ」の字が続きます。「情調」は「ムウド」に相当すると説明している文献もありました。「雰囲気」に近いと解することもできるでしょう。私は、「異国情緒」がもともと「異国情調」だったとわかったときに、少し理解できたような気がしましたが、同時に、この概念について更に深く調べてみたいと思うようになりました。



異国情緒の感じ方

—消費者美学の立場から—

牧野圭子



しかし本書の最終目的は、概念の定義を明確にすることではありません。異国情緒を感じるとはどのようなことなのか、どのような要因が存在すると異国情緒を感じる経験が生じるのかという問題の解明を目指しました。本書のタイトル『異国情緒の感じ方』には、「異国情緒を感じる状態に至るまでの経路」(p. ii)と、「異国情緒を感じる経験の種類」(p. ii)の、二つの意味を込めています。

本書では、異国情緒を感じる経験を類型化し、各類型の経験がどのような要因によって生じるのかを、異国情緒を描いた文学作品を通して検討いたしました。そして、「異国情緒の感じ方の本質は、異国を明確に意識することではなく、異国の中に自国あるいは自己を見出すことであるのかもしれない」(p. 171)という、本書なりの結論を導きました。

本書は、「消費者美学」の領域に属します。消費者美学とは、心理学と消費者行動研究と美学の境界に位置づけられるような領域です。この領域は日本ではまだ広まっていません。海外の消費者美学でも、芸術鑑賞行動に関する研究や製品デザインに対する反応の研究は行われてきたものの、異国情緒の問題を取り上げた消費者美学研究はありませんでした。そのため、本書を書き上げていく段階では、新しい領域を開拓していくかのような楽しさを感じていました。ところが、書き終えて世に送り出してみると、このような領域横断的な本は、結局どなたからも振り向いていただけないのではないかと、不安を感じるようになりました。日本社会心理学会から受賞のご連絡をいただいたのは、ちょうどそのような折でした。全く思いがけないことであり、非常にありがたく、大変嬉しく感じました。そして、本書の執筆を支えて刊行して下さった出版社と、著者の希望を汲んで表紙を考えて下さったカバーデザイナーさんに、改めてお礼を申し上げたいと思いました。

しかし、異国情緒については、まだ解明されていない点が多々あり、異国情緒の問題と結びつく様々な現象についても、多くの研究課題があると考えています。このたび賞をいただいたことを糧にして、今後ますます研究に精進していきたいと思っております。本当にありがとうございました。

(まきの けいこ・成城大学)

『社会心理学研究』掲載論文

第40巻第2号(2024年11月刊行)

【特集：文化進化と社会心理学】

豊川 航(ゲストエディター)

[序文]文化進化と社会心理学：なぜ文化進化研究が重要なのか

小林 豊

技術の累積的文化進化：Henrichの数理モデルと実験による検証

須山 巨基・中分 遥

技術の累積的文化進化に関する実験的アプローチ：Buskellの4つのタイプと行動実験のための操作的定義

田村 光平

文化的ニッチ構築とその周辺

【原著論文】

遠藤 仁

不安や悩みを抱える人に対する初期の気づきに関する研究：低強度のネガティブ感情表出を対象として

藤島 喜嗣・山田 一成

多次元完全主義認知尺度の妥当性：公募型Web調査データを用いた検討

【資料論文】

神原 歩・武藤 拓之・袖川 芳之・山田 昌弘

未婚と関連する心理特性の検討：愛着スタイルに着目して

林 幸史

記憶に残る観光経験：計量テキスト分析を用いた体験内容の探索的研究

【書評】

水野 景子

小田 亮・大坪 庸介(編)『広がる！進化心理学』(2023年、朝倉書店)

日本社会心理学会 2024年度春の方法論セミナー 開催について（速報）

2024年度春の方法論セミナーは以下の予定で開催予定です。関西での対面開催+ハイブリッド形式での配信予定です。詳細は確定次第メールニュース等でお知らせします。

タイトル：心理学実験 Updated：コミュニケーション研究の最前線にみる研究法の継承と発展

実施日：2025年3月13日（木） 14時～17時（予定）

企画運営：日本社会心理学会学会活動委員会

話題提供者：藤原健（国立中正大学（台湾））、水野景子（関西学院大学）

司会進行：日本社会心理学会学会活動委員会

実施方法：対面とオンラインのハイブリッド形式開催

対面会場：大阪工業大学 梅田キャンパス OIT 梅田タワー 2階セミナー室 201・202（会場定員85人）

（大阪市北区茶屋町1番45号 <https://www.oit.ac.jp/institution/access/index.html>）

編集後記

第65回大会の開催前は、ゆっくりと動く台風の進路を毎日追いかけて、「どうか来ないでください」と祈る日々が続きました。しかし結果的には、迷走台風に道を譲る形となり、混乱を避けるために、理事会で早めにオンライン開催の決断をいたしました。新幹線の運休もあり、この判断が適切だったという声も多くいただいております。一方で、対面開催を楽しみにされていた方々には、大変残念に思われたことだと思います。

しかし一昔前なら「中止」となっていた状況でも、オンライン開催が可能になったのは、岡隆先生が本会報で述べられているように「コロナ禍を経て獲得してきたスキルとメンタル」の賜物だと感じております。特に、大会開催校の岡先生の卓越した「スキルとメンタル」による迅速なご対応のおかげで、無事に大会を開催することができました。開催校の先生方やスタッフの皆様には、それまでのご準備を思うと、オンライン開催への切り替えは簡単なことではなかっただろうと拝察しています。それでも、そのご苦勞を微塵も表に出されることなく、速やかにご対応いただきました。岡先生をはじめ、大会運営に携わってくださった多くの皆様に、心より感謝申し上げます。また、ご参加の皆様にも急な変更にご対応いただき、有難うございました。

今回の大会参加記には、悲喜こもごものエピソードや、オンラインでも可能であったこと、逆にオンラインでは実現できなかったことなどが記載されています。シンポジウム、口頭発表、ポスター発表、そして院生リーグについて、先生方が印象的な文章を寄せてくださいました。読者の皆様にも共感しながらお読みいただけるのではと思います。

広報誌は年2回発行しておりますが、秋冬号では例年、学会賞受賞の喜びの言葉や名誉会員に推戴された先生方からの含蓄のあるお言葉を掲載できることが大きな喜びでもあります。読者の皆様には、あらためて研究の楽しさや論文執筆の充実感、そして特に村田先生のお言葉を通じて、学会活動に主体的にかかわることの意義を感じていただけるのではないのでしょうか。

今年の京都は「秋」が飛ばされ、夏から一気に冬となりました。皆様のご健康とさらなるご活躍を祈念しております。どうぞ良い年末年始をお迎えください。

（内田 由紀子・広報担当常任理事）